

理論的設定に滲みだす“現実”

——文字・表記研究の方法論思惟片々——

尾 山 慎

はじめに

冒頭から私的な話で恐縮であるが、筆者は、自身の研究を、一応日本語学ないし国語学と自称している（以下、本稿では日本語学／国語学という二者の区別を特にはつけない）。実は、そこに客観的な裏付けが必ずしもあるわけではなく、自らの研究をそう見なし、称しているにすぎない。学術振興会等への応募でも、人文社会系—人文学—言語学—日本語学というところで登録している（が、これも、いわば自己申告である）。一方、いわゆる文学研究は、人文学という「分野」までは同じだが、そのあとの下位である「分科」で別れ、文学（分科）—日本文学（細目）とされている。「日本語学」と「日本文学」とは、「細目」よりも一フェーズ上の段階ですでに分化している扱いなのであ

る。こういった分類項目は、いうまでもなく人間の学問や、好奇心に先行して存在した区分ではない（ようするにア・プリオリではない）のだから、後付けの、変動の可能性が大いにある仮そのめの分類に過ぎないといえそれまでである。だが、結構、我々は「語学」「文学」などといって互いを分類することが多くないだろうか。方法論の違いを認識することも確かにあり、筆者はそういった区別、差異の自覚が、別段無意味だとは思っていない。また、「日本語学／国語学」と「言語学」もまた、違うところがあるという認識が根強いのではないだろうか。時に、日本語学と日本文学の間にあるかもしれない距離より、日本語学と言語学との間にある距離の方が遠いのではないかと思われるようなところもある。実際に日本語・日本文学という学問自体を、研究対象として扱うものもある。それらは大変示唆

的であり、やはり、学術研究に臨むにあたり、そこに身を置くその根源的なこととして、極めて重要であると思う。

本稿では、筆者が立場をおくと自ら信じる日本語学／国語学の側から、「文学」そして、日本語以外を含めた「(一般)言語学」の歩みに学ぶところを見出して、それを通じて、興味の中心にしている文字・表記論の今後をあらためて考えていきたいと思う。あらかじめ断っておかねばならないが、互いの垣根をすべて取り払った学際研究を——といったひたすらユートピア的な趣旨の発言をしたいのではない。どこまでいっても方法論の違い、議論の重心の置き方の違いはやはりあろう。ただ、すぐ近くにある研究領域の方法論や成果が、薄い垣根一枚のせいで、知られないのも勿体ないことではないか、と思うのである。中心的に取り上げたいのは、言語資料に介在する「人」の問題、それを「分析する我々」の問題である。さらに、〈実際〉〈個別〉という parole 的なレベルと、〈理論〉〈抽象〉といった language 的なレベルという研究の両輪を、どうバランス良くチューニングしていけるかというところへ収束させて、論じてみたい。

一、人間と、生み出される言葉

一、一 作者と「作者」

『源氏物語』を精読すれば、紫式部の考え、紫式部の言葉がわかる——これはどれほどいま同意をえられるビジョンなのだろうか。筆者は中古文学の専門家でないのにわかにその答えは出したいが、書かれたものからその書いた人の考えをたどるということに、様々な困難と不可能性があることは、研究対象となる作品なり資料が異なっても通じるところがあるように思われる。

紫式部は遙か一〇〇〇年前の人だが、現代の作品であれば、生身の作者として、今も存命の人はいらる。たとえば、その人の作品については、生み出したその人が一番よく知っているのではないか、とも思われよう。しかし、当然、そう単純ではない。二〇一八年二月八日に「タモリ倶楽部」という番組(テレビ朝日系)で、「受験業界震撼の問題企画「作者の気持ちを作者は解けるか」作者本人が入試問題に挑戦し採点者とバトル」という内容が放映された。結果は、作者が自身の作品をもとにした入試問題に対して不正解をしばしば出し、決して満点など取

れなかったというもののだが、娯楽番組とはいえないいろいろと示唆的な企画だった。同時に、斯界ではとうの昔に問題意識として上がってさんざん議論されてきたことだともいえるだろう。つまりこのテレビ企画とその結果に、全く、意外性も新鮮みもなく「それはそうだろう」と思う研究者がかなり多いのではないだろうか。この放送は大変好評だったようだが、番組を通じて、一つ誤解と言っては大きすぎたけれども、おそらく認識されていないであろうことがある。それは、娯楽番組ゆえ当然のことながら——生身の作者と理論上の（抽象化された）作者との別である。以下、後者をカギ括弧付きで記し、区別しておく。まさにその入試問題等で「作者の考え」などといわれるときの「作者」が、生身の人間その人が考えていることは限らない——文章から読み取られる「考え」を問う——ということとは、おそらく番組において考慮されていなかったとみられる。つまり、番組中では——作者という術語の指すところは、そのまま生身のその人と同義であり、それ以外の何物でも無いと見做していたのであった。だからこそ、まさにその当人達を番組に出演させたのであろう。

生身の読み手と生身の作者というのは、当然だが確かに現実

理論的設定に滲みだす “現実”

に存在している “個” である。この論文の筆者である尾山慎が、たとえば『ノルウェイの森』を手にして頁をめくっているとき、そこに、生身の読み手尾山慎は存命者として実在し、また同じくこの世界に、この作品を生み出した生身の作者、村上春樹氏もまた、存命者として実在している。尾山慎の読み方は、いわば *parole* 的産物であって、無数にある読み手の、読み方の一つに過ぎない。村上春樹氏の日本語もまた *parole* である。その一方、研究上、生身ではない「作者」と「読み手」が設定されることもある。つまり、尾山慎は読み手だけれども、作品には、抽象的な「読み手」がおり、同じく、生身の村上春樹氏という作者と、「作者」がいる。この構造についてウンベルト・エーコ『小説の森散策』（和田忠彦訳 岩波書店二〇一三）は、現実世界に存在する個としての作者、読み手の内側に、内包される形で理論上の「作者」（エーコ…「モデル作者」）、理論上の「読み手」（「モデル読者」）が指定されている。この「読み手」はたとえば「内包された読者」といった言い方でもいわれているものに、やはり重なるであろう。言語による作品を言語の面から研究する際に、こうした理論上の設定が必要とされてきた。これは、研究領域によっては「何を今更」といわれることである

のかもしれない。しかし、筆者が主に研究の中心に置く上代、そしてその文字・表記論では、まだまだ新鮮に響くところがあるようである。

一、二 作品の研究か、作者の研究か

ロラン・バルトが、「作者の死」と言ったことは有名である。その一方で、AIが^{人上知能}いまだ短い小説でさえともに生み出せないことからすると、ある作品がある限り、生み出した人間が必ずいたことは前提される。「最高権威（神）」でないにしても、ともかくそれをものした人間がいる——。そのうえで、前節でみたとおり、それが生身か、理論上かということを考えることになる。生身の人間としての作者を想定しつつ研究する場合、それは必然的に伝記的要素を含むであろう。作品というよりむしろ作者の研究といえるような場合もある。たとえば阿蘇瑞枝『柿本人麻呂論考』（桜楓社 一九七二）では、丸ごと一章「人麻呂の出自と経緯」として、具体的には実に一一〇頁近くが柿本人麻呂の歴史的伝記の記述に費やされる。

一方で、カギ括弧つき「作者」——つまり、理論上の抽象としてのそれ、という設定で論じる立場もあるわけだが、抽象化しているの、「作者」は……という表現で行論さえ、されな

いこともある。表記論でいえば「書き手」と筆者は呼んでいるが、たとえば小松英雄「仮名文テクストの文字遺」(『日本語書記史原論』第二章 笠間書院 二〇〇六)では、青鉛書屋本土左日記を取り上げて論じる際、生身の紀貫之はもちろん、理論上の設定である存在も、わずかに一度だけ「原テクストの筆者」(二〇二頁)と言及されるのみである。その他の箇所(二〇〇—二二四頁)では一回も言及されない。論説の使用言語である日本語そのものの特徴もあるだろうが、「当てておけば」「表記し」といった動詞述語を、ほぼ主語なくして行論可能なのであって、結果的にはこのあたりに、理論上の「作者」にさえほとんど言及しない(視点をそちらにおかない)議論——純粋に言葉の表現だけを解析していく議論へと、さらにスライドしていく契機があるのだろうと思う。

話のステージを上代に移したい。生身の作者というものをどれくらい、あるいはどのように研究の対象とするかという点で、次の影山尚之氏の指摘を引こう。⁴万葉歌の研究者である影山氏によれば、かつて(氏の現年齢をもとに、大学院生であった頃として回顧されていることから察するに、二〇一九年現在から三〇—三五年前と思量される)、「特定の歌人を対象に定め、伝記の掘り起こ

しから徐々に基礎を固めてゆき、計画的に論を蓄積してその歌人の体系的把握を目指すというのが研究の「王道」だった」（六八―六九頁）と、実体験的という。そして、二〇〇〇年代に入って、身崎壽氏が「従前の伝記的研究の無効性を指摘」し、表現分析、作品論を通してはじめて歌人論（作家論）が成り立つと指摘したことを、当時はまだまだ新鮮な発言だったと回顧する。つまりこれは生身の作者を主たる目的に据える研究からの脱却であったことを意味する。いわば、作者から「作者」へということである（歌なので「歌人」とされているが）。そしてまた、ふたたび作者へと往還することも、「作者」論を経てこそ可能だとみる。理論上の「作者」を指定した以上、もはやそのため研究ではないわけだから、事実上、それは表現分析、テキストそのものの分析へと、力が注がれることになる。影山氏は、万葉集の歌よりも、生身の作者というのがもたら露出しにくい古事記は、神野志隆光氏の一連の研究（後述）で提唱されたように、抽象化した「作者」、あるいはそれさえも表にでてこない作品論、テキスト論としての研究へとシフトされていったという流れがあったことを指摘する。

影山氏は次のようにいう、「手を伸ばせば老獪な知識人・憶

理論的設定に滲みだす『現実』

良に届きそうな気がしてしまう」「実体研究への誘惑に抑制をかけにくい」（七一頁）と。万葉集歌とは、その一首一首が、結局はやはり〈生身〉〈現実の時間軸において生み出されたもの〉であることからくる、そこに尽きる所感であろう。歌一首一首を読み解いていく限り、それは *parole* 側にいることを意味する。だからこそであろう、次のように氏は結ぶ——「テキストの意思に沿って、歌の表現に施された彫琢をたずね、その心に迫ろうと努めること、華やかでなくともそれが唯一の方法だともっている。方法とよべるほどのものではないけれど。」（七九頁）と。かつて、森本治吉氏は、「体系的の研究に関する限り、用字法研究は万葉人の意識と離れても良い」（『文学』九一九三）と言っている。万葉集の仮名を悉皆的に調査し、まさに体系的にこれを知ろうとするとき、筆者はおおむねこの考えで臨んでいるところがあるが、ここでは森本が「体系的研究」ということにあらためて注意したい。逆手に取るようで語弊があるかもしれないが、体系的研究を目指すのでなければ、万葉人の意識から離れない（離れるべきでない）と読めるし、また個々の歌、個々の万葉人の意識に密着している限り、体系的研究に届かないとも読める——いずれも穿ち過ぎであろうか。なぜ、

ンシユールが、paroleを対象から外そうとしたか、なぜ langue をその対象としたか——結局、個へ寄り添いすぎると、構造的に、体系的に対象を把握できないからではなかったか。

一、三 術語の整理——作者と作品、テクスト

ここでは単刀直入に、矢田勉氏の次の指摘から挙げておきたい。

言語史にしても、文字・表記史にしても、その事象が個人的なものを超えて社会的な広がりを持って初めて史的叙述に組み込むに値するものとなる。その現象が仮にどれだけ重要な人物にまつわるものであったとしても、一人の上だけに見られる現象はそれ以上の意味は持たない。

〔言語史叙述と文字・表記史叙述〕『日本語史叙述の方法』ひつじ書房 二〇一六

上代の研究では、「一人の上だけに見られる現象」の過剰な一般化といえることが、かつてあった。代表的なのが人麻呂歌集の表記のバリエーションを、日本語表記の史的展開に読み替えられた一件である⁶。

さて、ここまで、先行論でいわれていることを含め、いくつかの術語を使ってきたが、あらためて整理しておきたいとおも

う。これは、筆者の研究の今後にも及ぶものであること、しかしながら、筆者以外の研究者の使用実態を否定する上に成り立たせようとする排他的な設定ではないことを予めお断りしておきたい。

作者…「」を施さない場合、実在する（した）人であることを示す。余剰的に、生身の作者という場合もある。伝記的要素を持ち込んで研究する。言葉、文章の研究をしていることと、この生身の人物自身を研究していくことが表裏一体となって進行する。行論上のわかりやすさのため、実際はなるべく、固有名詞で呼ぶのがよいと考える。

「作者」…「」を施す。理論上の作者。実在した人物としての作者に帰さない。たとえば死をテーマにした小説を書き残しており、そこに登場人物の深い慟哭が読み取れるとする。実は執筆直前に、その作品の生身の作者は、相次いで身内をなくしているという事情があった——としても、一切そこには踏み込まない。あるいは文章の表現などの分析に情報として一切、持ち込まない。

「読み手」…理論上の、その文章を読む人間。リテラシーも抽象化されているので、どこのだれなのか、という問い

かけは無意味になる。「内包」「内在」として西欧の文学理論で説明されてきたものにあたる。なお、生身の読み手、というのを、生身である作者に比するのであれば、「」なしの読み手とするとバランスがよいだろうが、論文にして発表する限り筆者・尾山慎しかそこに基本的には該当しないので、生身の読み手はわざわざ術語化することはないかと思う。必要あれば具体的に特定する形で固有名詞を記す。

分析者…すでに別稿で設定しているが、「読み手」「作者」双方を俯瞰して分析的に表現を洗い出したり、仮説をたてたりするので「読み手」・読み手とは区別しておく。

「書き手」…筆者が、文字表記論を論じる際に設定した概念で、「作者」に近いが、研究の上では、木簡や正倉院文書を扱うこともあり、「作者」という言葉自体がなじまない場合もあると考えて設定している。生身の場合は、固有名詞を記すようにする。

さて、以上の議論で、すでに使用しつつ明確に定義していなかった術語がある。それは「作品」である。文学研究では盛んに使う術語であるが、厳密には定義が一定しているとは限らない

理論的設定に滲みだす “現実”

ようなので、

作品…「」なしであれば具体的、「」つきであれば一般論

という区別を一応つけておく。実際には具体的な作品をさすのであれば、書名などを挙げればよいことなので、理論上の「作品」を使うことでほばしめられようかと思う。「作品」と呼ぶ限り、そこに作者ないし「作者」が必然的に、そこに共起する形で設定、想定されることになる。正倉院文書や木簡は「作品」とは呼びにくい⁷が、それは作者が具体的に誰か知りにくいというの⁸もさることながら、文学的な意図や技巧で生み出されたものではない、記録類ということにもよる。この区分（線引き）は、いささか筆者の主観が強いと承知しているが、「作者」と呼びにくかったり、あるいは「作者」「作品」という関係性でそれを取り扱うことがさほど意義を持たない（文書・記録類）場合、その言語資料をして単にテキストと呼ぶ場合があるという⁹ことにしたい。テキストはテキスト（英語）に同じだが、英語読みは「教科書」を指すなど一般的にも使われるので、フランス語読みに近いテキストとする。テキスト論といったとき、「作品」「作者」という関係性から、さらに、「作者」を可能な限り捨象する設定の場合をいう。すでに上に述べたことだが、

人間が書かない限り、その言語資料は生まれるはずがないので、そういう意味では完全に捨象することはできないが、限りなく対象外とする設定である。〈その文章を生み出した人〉の側にたつて見るといふ視座に、ほぼ関知しないことになる場合をいう。

二、読みえた言葉は書かれた言葉か

次の一文は、古事記の文章とその読みについて述べたものである。

「古事記」は、日本語文を直指して書かれたものであり、そのために当時において最も有効だと考へられたはずの、変体漢文体といふ文体を選び、かつその短所を補ふために「訓注」と「音注」を付けて、〈読めるやうに配慮されたもの〉といへる。(中略) つまり、この配慮を十分に読者が理解すれば、述作者の意図した訓読への道を歩むことになるわけである。

(西宮一民「古事記『訓読』の論」、『万葉』九四 一九七七、一三頁、傍線は引用者による)

この西宮氏の指摘のうち、とくに「述作者の意図した訓読」

というのに注目したい。それ自体が何を指すのか、直ちにはその意を得がたいが、しかし、それ以前に、訓読というのは「読み手」の行為である。そして述作者はいわば「書き手」である。そうすると、「書き手」はあらかじめ「読み手」にこう読んでほしいという予定をたてていることになり、これを裏返せば、「読み手」は、書き手の設置した手がかりに従って精緻に読めば、書き手の想定した言葉を得られるという考え方に結びつくであろう。敷かれたレールをしかるべく歩む(歩ませる)ということ、西宮の解説はそういう構図を説いたものと言わねばならない。しかし、これは必ずしも普遍ではない。とくに上代は漢字だけで書かれているわけで、仮名以外は読みが択一的ではないことが珍しくない(もっとも、この「述作者の意図した訓読」というのが亀井のいう「よめる」——ヨメるではなく——なのであれば、また話は別だが、おそらくそうではないし、そもそもこの論文に亀井孝の論文は引かれていない)。根源的なことをいえば、「これで、述作者の意図した訓読をなしえた」とどうやって見切るのだろうか。ゆえに、「書き手」が措こうとした言葉と、「読み手」が読んだ言葉は、それぞれまずは分けておくのが妥当である。それが、結果的に限りなく重なりあうかどうかであって(現代

日本語表記などは、一応それが期待できる）、唯一のことばが、「書き手」からも「読み手」からも離れたところに超然とあるのではない。⁹⁾

三、通時的観点と共時態——一般言語学より

三、一 構造主義的な共時態から、通時態論へ

ごく簡単に近代言語学史の概略をあらわしておきたい。一九世紀から二〇世紀にかけて欧州の言語学的主流は比較言語学であった。インド・ヨーロッパ諸語を見出したことはその最大の成果といって間違いない。系統や親疎を主に音声音韻の法則性から探求していくわけであるから、それはいわば変化・変遷を見出すとする追跡であって、つまりは、通時（史）論的言語学の権化ともいえる学である。この比較言語学を深く学び、かつ若くして成果もあげつつ一般言語学を講じたのがソシュール（Ferdinand de Saussure 一八五七—一九一三）であった。結果的にそちらが遙かに有名になったが、ソシュールは比較言語学でも明確な成果を残しているし、¹⁰⁾ 何より、彼に学問の基盤を形成せしめたのは、ほかでもない比較言語学の方法であった。ソシュールの一般言語学は、のちに構造主義言語学とよく称されるが、

理論的設定に滲みだす“現実”

その最大の特徴ともいえる視座の一つが、反歴史性であった。つまり、設定として時系列を捨象してしまうのである。歴史の連続上から抽象した議論のステージということになる。語史、語源のような類いは、検討の対象外に措いた、いわゆる「共時態論」とよばれる立場である。同時に、個別的な行為としての parole を排し langue を設定するわけだが、こういったいわば個別事情の捨象——抽象化の方向性は、ソシュールの死後もその度合いを強めつつ、さらに深化させられていく。プラール学派のちでたコペンハーゲン学派を代表するルイ・イエラムス（Louis Hjelmslev 一八九九—一九六五）は、たとえばプラール学派によるフランス語の「*h*」の発音に対する「振動音」という位置づけさえ、現実にとらわれた説明にすぎないと批判した。つまり、具体的すぎるというのである。言語事象の抽象化もここに極まりという中、このコペンハーゲン学派の出ず雑誌に二重分節に関する論文を発表して一躍有名になったのがアンドレ・マルティネ（André Martinet 一九〇八—一九九九）であった。アントワヌ・メイエ（Paul Jules Antoine Meillet 一八六六—一九三〇）の末弟子で、系統的にはソシュールの孫弟子にあたる。このマルティネの考えは機能主義ともいわれ、ソシュール

の構造主義、あるいは、プラーグ学派や、コペンハーゲン学派が血道をあげてきた音素の弁別を巡る考究に、あらたな切り口——経済性という概念を持ち込んで説明したのであった。その後、マルティネは、通時音韻論にも議論のステージを広げていくことになる。つまり、音韻の体系的変化あるいはその要因を解明するのに踏み込んでいくわけである。加賀野井秀一によれば、ヤコブソン (Roman Osipovich Jakobson 一八九六—一九八二：プラーグ学派) が「体系は均衡状態を作り出そうと変化するが、それはまた同時に別のところに不均衡をもたらすことになり、運動は果てしなく続いてゆくという」考えだったのに対し、「マルティネはここに経済性の考えを取り入れ、さらに一步をふみ出すことになる」(九五頁) という。それまでの通時音韻論は、「音韻変化は「調和のある体系」に向かうものだと考えていたが、(中略) マルティネは「調和とは経済性のあらわれである」と言い放った」のだった。これは、加賀野井も言っている通り、もはや、静止した共時態の話ではなくなっている——つまり、反歴史性ではなくなっているところを含む。加賀野井はこれを評価的にとらえ、「ヨーロッパの構造言語学は、いよいよ通時をも、体系あるいは構造の観点からとらえられるよう

に成熟してきたのである」と結んでいる(九九頁)。エウジェニオ・コセリウ (Eugenio Coseriu 一九二—二〇〇二) もまた、共時態という設定をしようとも、言語は結局の所変転から逃れられない、通時上の産物ということを述べている。筆者私見では、ソシュールはそれは承知の上での理論的設定ではなかったかとおもうが、それでも(理論上の設定であっても)、時系列を完全に捨象することの不可能性が、やはり目につくのは事実であったからこそ、これだけ、ソシュール以降紛糾してきただろう。ソシュールからマルティネへの数十年間は、静止した言語態としてつきつめて、抽象化した特徴を取り出すほどに、結局、そこに変遷・変化という要因が露出してきてしまう、せざるを得ないということを象徴することになった、それに要した時間だったのかもしれない。このように、結局、理論上設定しようとも、「宿命的に流れてしまう時間」が滲んでくると似たことは、海に向こうのアメリカの構造主義言語学にもおきている。ただし、こちらは「時間」ではなく「意味」のほうである——ブルームフィールド (Leonard Bloomfield 一八八七—一九四九) は、意味を論じることが言語学の弱点とまで言い切っていて、まさしく構造的にこれを分類していったわけだが、結局の

所、真に意味を感じせずに分類ができようはずがない。チョムスキーの師匠であるセリグ・ハリス (Zellig Sabhetai Harris 一九〇九—一九九二) はその臨界点に達していたとされる『構造言語学の方法』(一九五二)。ブルームフィールドやエドワード・サピア (Edward Sapir 一八八四—一九三九) の弟子世代 (ポスト・ブルームフィールド) が分布論を展開したものの、意味を真に排除せんとする分布論は、もはや袋小路であった。若くしてこの方法をたたき込まれたチョムスキーも、それらは表層的な分類論に過ぎないと後に強く難じている。前出の加賀野井は、たとえば「conceive」と「deceive」という二単語について、本当に意味に関与せずにこれを分類するならば、「conceive」「deceive」に分けてしまうことが起こりうるはずだ、という。しかしこの愚を犯す言語学者はいらぬまい。つまり、意味を完全に捨象することは、理論上の方策でも実際は不可能であり、ちょうど共時態設定に「時間」が宿命的に滲んでくると同様、シニフィアンの分類のみにこれを特化しようにも、意味は分析者の脳裏に浮かび、滲み、染み出してこざるを得ないのである。理論上分離しようとも、設定上のこととして割り切ろうとも、結局の所捨象しきってしまえない、時間、そして意味——その

理論の設定に滲みだす “現実”

ことは、言語資料における「作者」「書き手」という存在も重ねられるように思う。どれほど捨象しても、完全に消し去ってしまえないものとして。

三、二 「奈良時代」という共時態」は設定可能か

日本語・日本文学の世界でも、たとえば「奈良時代」という共時態」という言い方がされる場合がある。前節でみた西欧言語学の観念に照らせば、厳密にはこれは妙な言い方で、共時態というより、時系列上にある、つまり通時上の一区間を切り出しているだけのように思えるが、前後の時代をまったく考慮しない静止態としてとらえるのであれば（それが可能なら）擬似的に共時態として設定できると思う（基本的に、内省がきくのが言語学でいう共時態だろうと思われるので、奈良時代のそれは擬似的共時態とみるほうが無難だと思う）。ただ、表記論にせよ、内部に時系列を見ようとしているのが実際であり、かつまた、主流を形成してきたと思われる。たとえば沖森卓也『古代日本語の表記と文体』（吉川弘文館二〇〇〇）が論じたように、倭訓なるものの初出、訓仮名の初出といったことを、発達、展開という意味でのマップ上に描いていくこと、あるいはまた稲岡耕二の人麻呂歌集における表記の方法を時系列的な展開としてとらえたの

も、変化・変遷を追跡、把握するという手法にあたるが、これは古代日本語の研究において、一つの王道的論法であった。とりわけ、典型的なことのひとつが、万葉集の四期分類だ。実際、筆者は学生時代、仮名書きは万葉第三期以降と概説書で学んだし、当時の自身の研究をまとめた学位論文も、まさしく通時的な観点であった。とりわけ、平仮名への変遷——つまり次代に及ぶ話になるとこれはもう完全に通時論である。かように、内部に変遷をみている時点で、それはやはり通時論である。奈良時代の、と区間を限定しても同じ事である。ただし、共時態論にも「時間が流れている」「流れざるを得ない」と議論されても来たわけだ。意識してかせざるか、このことに寄せて、どれほど身をゆだねるか——つまり共時態論という看板をあげつつも事実上流れる時間を無視しないのか、あるいはあくまで、作業仮説として時系列的変異をストイックに捨象する（し続ける）のかは、研究者ごとの立場があると思う。それらは、一つの研究上の立場であり、何より、研究の方法論としては、あり得るものである。一方で上代の文章・文体論について、大槻信氏は漢文訓読に依存したものを想定し、未だ「スタイルがなかった」とし（『日本語の起源と古代日本語』臨川書店二〇一五）、いわ

ゆる和文体を平安朝以降に措定する。また、乾善彦氏は仮名の成立をもって日本語散文はその文体を獲得したといひ（『日本語書記用文体の成立基盤』塙書房二〇一七）、犬飼隆氏は「八世紀には平安時代の和文語にあたる散文の日本語文は存在せず、生成途上だった」とする（『奈良時代語』と平安時代語）『日本語学』明治書院二〇一八）など、生成的な点に着目するものもある。これらは、いわばまさしく通時論の議論であるといえよう。筆者は、たとえば訓読——広義に、中国語という異言語を摂取するにあたってのそれとしては、結果的に、メソッド化・定着化したものの、臨時的、一回的な、その文脈に依存的なもの、そして直接受容（字音語）の三種があったと考えている。¹⁵漢字と日本語の関係に時系列を持ち込まないという気はなく、その三種の存在に前提される時系列は認めるべきと思っている。つまり、純粹な共時態論上では、発達や生成を説かず、すなわちあったかなかったかで留まるので、筆者の立場では必然的に時間を流れさせる必要がでてくるし、そうして、やはり後世への連続と不連続を、語る必要があると思っている。

三、三 資料の横断と、「閉じた体系」

近時は、すでに紹介したように、古事記なり万葉集なりを、

一つの閉じた体系として捉え、研究する立場が提唱されている。両方とも、通時上の産物だが、事実上時系列から昇華させて、その内部で考証するというものだ。それこそ、文学研究の方で提唱されていることだが、近時あらためて、上代の文字・表記・書記論も、これの如何を問われるときであるようだ。万葉集に対して、乾善彦「万葉集「仮名書」歌巻の位置」(『日本語書記用文体の成立基盤―表記体から文体へ―』塙書房二〇一七・第二章)で「万葉集二十巻がひとつの作品、ひとつのテキストとして『そこにある』という視点が必要であろう(一九四頁―一九五頁)」とされ、神野志隆光『万葉集をどう読むか―歌の「発見」と漢字世界』(東京大学出版会二〇一三)で「二十巻としてあるものをひとつの全体として見なければなりません(はじめに三)」とあるように、この数年以内でも、縷々説かれてきているところである。少し前では、前掲影山論文も指摘するように、神野志隆光氏が『古事記の達成』(東京大学出版会一九八三)、『古事記の世界観』(吉川弘文館二〇〇八)でそれを先駆的に遂行したのであった。古事記に対するアクセスとして、八世紀・律令国家におけるものとして取り扱うわけではないという¹⁶という点は、当然、ことに歴史学見地からの批判があった。代表的

理論的設定に滲みだす“現実”

なのは水林彪氏であろう。下記引用は、神野志氏が水林氏の著作『記紀神話と王権の祭り』に寄せた書評に反論する水林論文からの一節である(神野志隆光氏のご批判に応える―拙著『記紀神話と王権の祭り』書評に対する反論)(『史学雑誌』一〇二―二二一九九三)(神野志氏は―筆者注)これを神祇令祭祀の祭儀神話として読もうとする観点がないこと、いいかえれば『古事記』を律令国家時代の政治思想として捉える観点はおたれながらも、『古事記』研究を律令国家論へと発展させてゆく観点をお持ちになつていないということである。

『古事記』研究は律令国家論研究の一環としてなされねばならないこと

八世紀律令国家の正統思想の直接的表現形態およびその儀式的表現から切りこんでゆかねばならないところの、王権そのものの手になる公式の政治思想的作品なのである(以上八六頁)

(神野志氏の論は―筆者注)ほとんど『古事記』の解釈論に終始するものであった(八七頁)

水林氏は法制史が専門ということで、神野志氏が『古事記』研究を律令国家論へと発展させてゆく観点をお持ちになってい

ない」として、繰り返し指弾するのは立场上当然のことと理解はできる。しかし、すでにみてきたように、方法論として作品に閉じた中で研究するということがあり得る。これは、つまり

は立場の違いであり、いずれかが正解という二者択一では、ない。通時か共時かといえ、遙か一〇〇年近く前に、欧州で構造主義言語学者と青年文法学派の間で火花が散らされたことが思い起こされよう。古事記をどこにおいて、古事記の何を、古事記をどのように研究していくかという観点での、この決定的にもみえるすれ違いの構図は、別段、空前にして絶後というわけではない。むしろ、繰り返しされてきたようなものだ。¹⁷

すでにみてきたように、『万葉集』を一つの閉じたものの、これで一つの総体として扱うというのは、方法の理論上、そう措定してみることである。このように提案された以上、今後、この点についてどういう立場で研究するのかについて、各々改めて問われることになると思われる。実際に、まさにそのような視座に身を置くのか、あるいは対象化しつつ、資料の外にも出て比較するし、時間軸上でそれを問うこともある、といった立場をとるのか。あるいはそれ以外か。かように立場、視座の可能性が提案され、かつまた影山論文のような来し方行く末

を明快に示す記述が提示されている以上、もはや、黙殺や傍観、無関心は、あり得ないと思う。

時系列の変遷から捨象する——すでに、一般言語学の流れでもみたように、完全に捨象することは不可能でも、概ねそこに立場を置くのであれば、それは歴史的時間軸からの遊離を意味するから、理論上、たとえば古事記と日本書紀と万葉集は、互いに関連を結ばない、それぞれ独立したものと、少なくとも一旦は、みるべきものになる。実際には、分析者は自由に動き回ることができるし、そうしたって自由であるが、表記研究もまた、文学研究が試みた、テクストの内部に体系をみて、そこに（一端）閉じられてみるという方法を模索してもよいであろう（そして、それに批判ももちろんあってよい）。こういったことを考えると、古事記と万葉集を直ちに比較することの意義は慎重に計らねばならない。吉岡真由美氏は、近世国学において、古事記のための用字分類を万葉集に敷衍しようとして無理が生じているという研究史を明らかにしている。¹⁸ 連続性、通底することを模索する意義があるのと同様、不連続と、断絶を明らかにするのも同じ意味をもつはずであろう。

四、おわりにかえて

以上、様々な話題に渡ってみてきた。それぞれ、簡単に振り返りつつ、どのように総括されることか、述べていきたいと思う。まず、生身の作者と理論上の「作者」を巡る話は、言語学で言う parole と langue に通じるところのある話である。その具体的作品自体は parole の産物であるが。

言葉は人間が生み出すものである以上、「作者」「書き手」は完全には捨象しきれないし、結局そこにあることばを読むことを通して、書くことのそれをシミュレートし、「成り代わり」が起こりうる。分析するというのはすなわちそういうことなのだろうけれども、しかし、全ての結果には意味、理由があり、書き手は常に読み手に配慮しつつ書くという観点から徹底的に意味づけされ、一般化されてしまうのは、時に問題であろう。

これらの問題に向き合い、研究する人間は、そこで様々な「揺らぎ」に身を置くことになるだろう。いわば、それを知ることを目的に、以上、本稿は述べ来たった。たとえばある表記の理由を巡って、それが、偶発的・無為だとして捨て置くことと、有意・自覚的な意味づけをすべきとの間で判断が揺らぐこ

とがあるだろう。あるいはまた、作者論がそうであるように、生身作者と抽象「作者」との間でゆれるせめぎ合い、そして静止した時間と流れる時間との間で、どう立ち位置を見定めるかというせめぎ合い、さらには、個別事象と理論・抽象との間でゆれるせめぎ合い——こういった様々な狭間の中で、いわばその分析者の〈可能性としての立ち位置〉は、揺らぎ続けるのではないかと思う。いや、実際どれも、双方の極だけがあって、揺らいでいるのはまさしく分析するその人自身なのだが——。

「揺らぎ」は、立場の表明によって、あるいは立場の自覚によってある程度収めることはできるだろう。一般言語学において、いかに時間を止めてみても、どうしても、流れ出す時間をせき止めることはできなかったし、どれほど意味を無視しても、背景に透けて見えてくる意味を、ないことにはできなかった。同じように、ここにみたそれぞれの「揺らぎ」は、自ずとは完全には静止しないのだと思う。

筆者でいえば、生身の作者、個としての事象それ自体にはあまり関心をおいていない一方、基本的に個別事象検証の積み重ねが、一般化を可能にすると考えている。体系化も個別的な事例を総括的に見てこそ、と考えたい。また、完全に静止した時

問態で考えることはなく、やはりそこには形成、変遷があるという視点をもっておきたい。一方で八世紀の日本語における文字・表記という視座で論じられたらと企てる一方、木簡と万葉集を、万葉集と古事記を安易に比べたりしていいのかという躊躇もある。このように書き連ねると、随分と場当たりのなご都合主義に見えてしまうが、しかし、これが筆者にとつての現状と自覚する。どちらかといえば、構造主義的に研究しているつもり——つまり、観察する対象同士が、また考究したその見解が、矛盾無く、大きく破綻無く体系性を描いてくれればと、研究を進めている。無論、歴史資料を扱う以上、例外はでてくるし、例外とまでいかなくとも、具体的で、個別的な事象説明、いつてしまえば、その一例のためのオーダーメイドのような考なり位置づけを必要とする場合がどうしてもでてくる。それは一見構造主義的な研究には置きようがないノイズのようなものになってしまふ。数学ほどの抽象体系はもちろん、望めない。しかし、だからこそ、ソシユールをはじめとして、paroleを検討対象の埒外においてきたのだとあらためて首肯できる。しかし、日本語の歴史、文字表記の歴史を考えていく上で、やはりそう突き抜けて一般化だけで押し切ることもできない。言語

学に基層と表層という二分があるように、相当に一般化できることに上乗せする形で、個別的な趣向や試みがあることは当然だし、またそれでこそ言語行為たりえるのだろう。万葉集の「聲瞻（うっせみ）」という表記は万葉集に一例しかない¹⁹、若かりし頃の大伴坂上大嬢による大変に凝った表記である。個人的には万葉集随一の「名作」表記であるとも思っている。臨時的なもの、技巧的とは、訓仮名でも個別的な説明としてよくとられる手法だが、作者による意匠、その場の一回限りの思いつきというのは、たとえばこの例に関しては、たしかに否定しようがなく、まさにそうなのだろうとは思ふ。しかし、それだけなのか。その人にしか思いつかなかった、それほど、一から十まで奇想天外で例外的なことなのか。これ自体はオリジナルでも、通底する方法論はあるのではないか²⁰——たとえば字音をウツセミにあてているという点では、優れて音仮名であるというべきである。音仮名であること自体が否定されるわけではない。よってあくまで表音用法と位置づけること、これがひとまず体系的、構造的に捉えるやり方である。これを、表音用法相当として構造的分類から緩く遊離させたようにして個別的に措くと、結局の所、体系的なおよそ果たせないと思っている。構造的に

分析するなら、広く一般化しうる表音用法という位置づけがまずは第一であり、詳細かつ個別的にこれに説明を与えるなら、その上で、余剰として上乗せ的に試みられた個別事象だとみることになる。

何が一般的で、何が個別的呢を、同一平面上での仕分けではなく、層のようにして捉えることが、今後の研究の指針になると、考えている。

- 1 たとえば安田敏朗『日本語学のまなざし』（三元社 二〇一二）、同『国文学の時空―久松潜一と日本文化論』（三元社 二〇〇二）など、氏一連の著作が参考になる。
- 2 「内包された読者」(W.イザー) (著) 轡田 収 (翻訳) 『行為としての読書』岩波書店 一九八二)
- 3 ロラン・バルト著 花輪光訳『物語の構造分析』（一九七九年）所収「作者の死」
- 4 「万葉集の作品論的研究」(『万葉集をヨム』笠間書院 二〇一九)
- 5 新沢典子『万葉歌に映る古代和歌史』（笠間書院 二〇一八）では、「読者」ということについての立場が示されている。「今ある万葉集を読むというのではなく、成立当時の万葉集を当時の読者がどう読んだかということの問題とする」とある(九

頁)。

- 6 これについての詳細は尾山慎『二合仮名の研究』（和泉書院 二〇一九）の終章・第一節(四三頁)で論じている。
- 7 尾山慎『二合仮名の研究』（和泉書院 二〇一九）二二―二三頁で説明している。
- 8 亀井孝「古事記はよめるか―散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の問題―」(『亀井孝論文集四』吉川弘文館 一九八五) このことについては、尾山慎「上代の文章・表記再考―読み手・書き手・分析者から考える理論構築―」(令和元年度美夫君志会 全国大会口頭発表資料 二〇一九・七・七 於中京大学) に詳細を述べている。
- 10 「印欧語族における母音の原始的体系に関する覚え書」(フランス語: *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes* 一八七九 ライプツィヒで発表) 当初、青年文法学派の反発もあって、低調な反応だったという。
- 11 『二〇世紀言語学入門』（講談社現代新書 一九九五）
- 12 『うつりゆくこそことばなれ』（かめいたかし 田中克彦訳 クロノス 一九八二）
- 13 これをよく、チョムスキーの構造主義言語学批判とされるが、ヨーロッパのそれを批判したと言うより、アメリカのポスト・ブルームフィールド派を難じたのであった。そもそも、アメ

リカのそれは、アメリカ先住民の言語を分析しているうちに、結果的にヨーロッパの構造主義言語学的に近い方法をとることになっただけで、ヨーロッパから移植されたわけでもないし、ヨーロッパ言語と直接連携して結成されたものでもない。

14 略体から非略体へという表記の発展的展開での把握である。

これを巡ることは、注6で、筆者もすでに触れている。

15 詳細は、尾山慎『二合仮名の研究』（和泉書院二〇一九）おもに一一〇頁—一二二頁に論じている。

16 神野志氏は、『万葉集をどう読むか…歌の「発見」と漢字世界』（東京大学出版会二〇一三）で、万葉集についても「あったもの（現実の歴史）はテキスト理解の問題ではないということですよ」といつている（はじめにiii頁）。

17 エウジュニオ・コセリウによれば、言語学史は、その始まりルネサンス、ルネサンス—一七世紀、一八世紀、一九世紀、二〇世紀という区切りで、概ね、理論／歴史・比較という両方法論の間を振り子のように往還している歴史なのだという。たとえば、神野志氏が、古事記というものの中に閉じた論究をし、追随する研究者が多くてた後、またその中から、歴史世界に出てこようとする流れになぞえられそうである。

18 吉岡真由美「近世の用字法研究における訓仮名の位置づけ

——『古事記伝』の影響に注目して——」（美夫君志会 令和元年度全国大会発表資料二〇一九・七・七 於中京大学）

19 この例を巡っては、尾山慎『二合仮名の研究』（和泉書院二〇一九）三七頁に詳細を論じている。

20 非常に通俗的な例であるが、一時、「なう」「わす」「ういる」という時制をあらわす接尾辞が若い人たちの間で使われることがあったようである（いまも生き残っているようだ）。「バイトわず」はバイト終わったという意味であり、wasを日本語文に混ぜて、かつこの位置に来るのは、英語話者にすれば荒唐無稽、支離滅裂といったところだが、テンスが後ろにくるのは日本語としてはごく普通である。つまり、基層部分では大きな違反ではないという言い方も出来る。表層では、大いにイレギュラーな表現ではあるけれども。

【付記】

本稿をなすにあたり、磯部敦氏（奈良女子大学）に様々な教示を受けた。ここに記し、感謝申し上げる次第である。また本稿は、二〇一九年度 科学研究費補助金 基盤研究（C）19k00645「古代日本語における表記体と表記環境にみる〈万葉仮名〉と〈仮名〉との相関」（代表者・尾山 慎）の成果の一つである。

【参考文献】

- 池上領造「文字論のために」(『国語学』二三 一九五五)
井手 至『遊文録』萬葉編(和泉書院 一九九九)
乾 善彦『漢字による日本語書の史的研究』(稿書房 二〇〇三)
乾 善彦『意味と漢字』(『朝倉漢字講座』漢字のはたらき 朝倉書店 二〇〇六)
亀井孝他「漢字の投影にとらえた日本語の景観」(『日本語の歴史2』第五章 亀井孝 大藤時彦 山田俊雄 平凡社 二〇〇七復刊)
今野真二「表音的表記」(『清泉女子大学紀要』五五 二〇一一)
齋藤希史『漢字世界の地平 私たちにとって文字とは何か』(新潮社 二〇一四)
田島 優「表語文字としての漢字」(『朝倉漢字講座』漢字のはたらき 朝倉書店 二〇〇六)
フロリアン・クルマス、斎藤伸治訳『文字の言語学…現代文字論入門』(大修館書店 二〇一四)

—— おやま しん・本学准教授

理論的設定に滲みだす“現実”